

味噌汁令嬢と腹ぺこ貴族の

おいしい日々

1



／ サレイユ伯爵 ／



アンスマリーが働いているお屋敷の主人。性格に難あり。

／ ディオン ／



アンスマリーが働いているお屋敷の跡取り。おにぎりとお漬物をきっかけにすっかり彼女の料理の虜に。食べると幼く見えるが、実はイケメン。

／ アンスマリー ／



元は男爵令嬢だったが、メイドとして働くことに。前世の記憶を頼りに味噌汁をつくる決心をする。お食事のことを考えている時間が一番好き！

／ 執事長 ／



優しすぎるがゆえに、常にサレイユ伯爵に振り回されている。

／ 料理長 ／



頑固なラーメン店のおやじのようだが、実は繊細な料理をつくるシェフ。アンスマリーの和食を巡って衝突し……。

／ イネス(メイド長) ／



頼れるみんなのお母さんのような温かいメイド長。何かとアンスマリーを気にかけてくれる。

／ クロエ ／



アンスマリーのメイド友達。元気で人懐っこいポメラニアンのような女の子。

味噌汁令嬢と腹ぺこ貴族のおいしい日々 1

# 登場人物



味噌汁令嬢と腹ペこ貴族の

# おいしい日々

目次

プロlogue	味噌の香る町角	006
第1章	和食が恋しく	008
幕間1	ティオンはおにぎりが絶になつてゐる	048
第2章	作れるものかお作つてみよう	050
幕間2	ティオンは一日を振り返る	088
第3章	サレイユ様でのおいひの日々	090
第4章	夢にまで見た、味噌汁!!	133
第5章	みんな、味噌汁飲んでみない?	143
幕間3	ティオンはおれがしたい	176
第6章	食材を求めてバカンスへ	179
第7章	晴雲は嵐の前触れ	206
第8章	ひとり、放り出されて	220
第9章	ひとりのじゃなかつた	239
幕間4	ティオンは思ひ悩む	247
第10章	二人で前を回して	252
第11章	さあ、再出発だ	271
幕間5	ティオンは明日に備える	288
第12章	私たちの新たな一日	290



とある町の、落ち着いた雰囲気の裏通り。住宅や工房が多く集まった、閑静な一角。

しかし今そこには、たくさんの人間がひしめいていた。みな、一軒の店に熱いまなざしを注いでいる。店からは、一風変わったいい香りが漂ってきていた。

「ああ、腹が減ったなあ。店が開くまでこうやって待っていないといけないのは辛いぜ」

「でも開店前に並んでおかないと、さらに待つことになるしなあ」

よく見ると、そこにいる人たちはきちんと行列を作っていた。そうやって行儀よく、その店が開くのを待っているらしい。空腹をまぎらわせようとしているのか、みな他愛たわいのないお喋りしやべりに花を咲かせている。

「しかし、不思議な店だよな。料理はとびきり変わってるし、店主はまだ若い女の子だし。十六だっけ、十七だっけ？ それくらいの年頃だよな」

「本人は何も言わないけれど、元貴族だって噂うわさもあるらしいな？」

「俺おれも聞いたな、その噂。でもそう言われるのも納得だぜ。なんか気品があるんだよな、あの子。でも偉ぶったところなんて少しもなくて親しみやすいし、とつても愛想もいいし。やっぱり違うのかな？」

「どつちでも関係ないさ。あの子がとびっきりの頑張り屋なのは確かだからな。屋台を始めて、

あつという間に店を持つまでになり、しかもこの大繁盛だ。そこら辺の普通の人間にできることじゃないって」

「これだけうまい料理を作れるんだから、繁盛しないほうがおかしいよな……ああ、この味噌の香り、たまらない……早く味噌汁を飲みたいぜ……」

「今日の味噌汁の具、何だろうな？ 昨日のトマトとトウモロコシも面白かったが。ああ、駄目だ。腹が減りすぎて倒れそうだ……」

彼らが切なげにため息をついた時、店の入り口が開いた。綺麗な黒髪の、生き生きした緑の目の若い女性が姿を現す。

「お待ちせしました！ これより開店です！ 今日の味噌汁は、ナスとキュウリですよ！」  
彼女の軽やかな言葉に、集まっていた人々は一斉に歓声を上げた。

「待ってたぜ、アンヌマリー！」

「毎日、あなたの味噌汁が楽しみでさあ」

「そうそう。おかげで店が休みの日なんか、やる気が起きなくて困るんだよ」

嬉しそうに笑う客たちのそんな言葉を聞きながら、アンヌマリーは彼らを店の中に案内していった。この上なく幸せそうな笑顔で。

私は男爵令嬢として、何一つ不自由ない暮らしを送っていた。

けれどもいつも、物足りないものを感じていた。

おいしいものを食べるたび、これじゃないと思わずにはいられなかった。

自分が何を求めているのか、いくら考えてもそれは分からなかったけれど。

「すまない、アンヌマリー。私たちの家は、ミルラン男爵家はもうおしまいだ」

ある日唐突に、お父様がそんなことを言った。涙をこらえ、唇を震わせながら。

「お父様、それはいったい……どういことなのでしょう？」

余りに唐突な言葉に、頭が真っ白になる。そんな私に、両親は少しずつ状況を説明してくれた。

商人だったお父様は若くして爵位を買い、ミルラン男爵家を興した。私が生まれる少し前の話だ。その後もお父様は商売を続け、我が家はどんどん豊かになっていった。

しかし不運なことに、お父様が商売に使っていた船が嵐で沈んでしまった。最先端の船と、他の

貴族たちに頼まれていたとびきり高価な商品がたくさん、海の藻屑もくずになってしまったのだ。その結果、お父様は莫大ばくだいな借金を抱えることになってしまった。

待ち望んでいた品を手に入れられなかった貴族たちは怒り狂い、王に申し立てた。ミルラン男爵は爵位に値する人物ではない、と。その結果、ミルラン男爵は取り潰されることとなったのだ。

けれど私たちには一つだけ、希望が残っていた。全ての事情を知った陛下は、借金を全て返済できれば、またミルラン男爵家を復興させる、と約束してくださいましたのだ。

その希望にすぎり、両親は海の向こうに旅立つことを決めた。莫大な借金をすみやかに返すには、多少の危険も覚悟しなくてはいけない。

「私たちは豪商の生まれだし、私は若い頃、商売であちこち旅をした経験がある。問題ないさ」

「でも異国の地での、当てのない過酷な旅に、あなたを連れてはいけないわ」

「だからお前はこの地で、この国で私たちを待っていてくれ。サレイユ伯爵のもとで」

「……サレイユ伯爵、ですか？ ……その、どうして私が、その方のところに？ 今まで、私たちとは全く付き合いない方だと思うのですが……」

疑問で頭が一杯になりながら、それでもできるだけ冷静にお父様の顔をじつと見る。お父様は申し訳なさそうに目を伏せ、静かに言った。

「……すまない。親戚も友人も頼れなかったんだ。申し訳なさそうに、絶縁を言い渡されてしまった。みな、借金の返済に巻き込まれることを恐れていたようだ」

「みなさまのことを恨うらんでは駄目よ、アンヌマリー。立場が逆であれば、私たちもそうしていたでしょうから」

そうして二人は、さらに衝撃的な言葉を告げてきた。サレイユ伯爵は私の引き取りを承諾してくれたものの、そこには一つ条件があった。なんと私は、これから彼の屋敷でメイドとして働くことになってしまったのだ。

「大丈夫よ、あなたは私たちの自慢の娘だもの。メイドの仕事だって、すぐに覚えられるわ」

涙目のお母様が、それでも私を励ますようにぎこちなく微笑みかけてくる。それに合わせて、お父様もまた優しく言った。

「それでも、異国で旅をするよりはずっと安全だ。伯爵家のメイドなら、生きていくには困らない」

呆然と立ち尽くす私をしっかりと抱きしめて、両親はさめざめと泣いていた。

自室に戻り、のろのろと荷作りを始める。本当は、両親と離れたくなかった。どうせ今まで通りの暮らしができないのなら、せめて二人と一緒にいたかった。けれど無理についていたら、きつと足手まといになってしまう。それが分かっていたから、連れていってとは言えなかった。

心細さに泣きそうになりながら、震える声でつぶやく。

「今まで一度だって、家事なんてしたことがないのに……刺繍ならできるけれど、掃除も料理もできないわ……メイドだなんて、私には無理よ……」

……本当に？

自分がつぶやいた言葉に、強烈な違和感を覚えた。私は、家事をしたことがある。掃除も、料理も。むしろ料理は得意だし、大好きだ。そんな思いが、次々とあふれてくる。

「……そもそも私、下宿で一人暮らしだったから、掃除も洗濯も買い物も料理もゴミ出しも、全部自分でやってたんだって」

胸の内に、次々と浮かんでくる不思議な記憶。でもこれは間違いなく、私の記憶だ。

「そうよ、私はごく普通の大学生なんだから。……ってちょっと待って、どういうこと？」

私は十六歳の男爵令嬢アンヌマリー・ミルラン。私は二十歳の大学生。まったくかみ合わない二つの記憶が、二人の私が、きれいに頭の中で共存している。

「奇妙なこともあるものね。どっちの記憶も同じくらいリアルだわ」

小首をかしげた拍子に、壁にかけられた鏡の中の自分と目が合う。ゆるく波打ったつやややかな長い黒髪に、きらきらしたエメラルド色の目の乙女。毎日目にしている、とつても見慣れた顔だ。

大学生として暮らしていた私は、こんな色の目をしてはいなかった。顔立ちは何となく似てはいる気がするけれど、今の私とは別人だ。何とも言えない微妙な違和感にむずむずする。

「……やっぱり何だか、不思議な感じ。でも、家事をしていた記憶が戻ってきたのはありがたいわ。考えても答えは出そうにないし、細かいことはひとまず気にしないでおこう」

今までの私、男爵令嬢のアンヌマリーは見事なまでの箱入り娘だった。令嬢としての教養や礼儀作法はしっかりと身につけているけれど、当然ながら家事の経験はゼロだ。

でも今の私、二つの記憶を持つ私なら、メイドの仕事だってどうにかこなせる……はず。要するに、住み込みの家政婦のようなものだと思えばいいのだろうし。

大学生だったはずの私が、なぜか貴族の令嬢になっていた。どうしてそんなことになっているのかは分からないけれど、いずれそのうち解明される、かもしれない。

「それよりも、早く荷造りを終わらせてしまわないと」

大きな革のトランクが、荷造り途中のまま床に放り出されている。さっきまでの私の動揺を表すかのように、とびきり上等なドレスが一着だけしまいこまれていた。

「これからはメイドとして暮らすのだから、ドレスが必要になるような場面はないはずよ」

ドレスを取り出して、代わりに金貨をたつぷりと詰め込む。もちろん、万が一に備えて小分けにして。これは先ほど両親がくれたものだ。これからの生活に必要なだろうと、そう言つて。

両親の気持ちに感謝しながら、さらに荷造りを進める。できるだけ地味な私服と下着、それにヘアブラシや手鏡などのこまごまとしたものを選び出しては、トランクに入れていった。

そうこうしているうちに、荷造りはあっさりと終わつていた。ついさっきまで、あんなに手こずっていたのが嘘うそのように。

「はい、完了！ やればできるわね、私」

ちよつとした達成感を覚えながら、トランクを勢いよく閉めて気合を入れた。

「アンヌマリー、次に会えるのはいつになるのかしら……ああ、離れたくないわ」

「できることなら、連れていってやりたいが……旅先では何があるか分からないからな」

「ねえ、今からでも旅先を変更できない、あなた……？ やっぱり一緒に……」

「駄目だ。私たちは一刻も早く借金を返さねばならない。辛い、これが最善の選択なんだ……」

別れの日の朝、両親はまた大泣きしていた。荷物を積み込んだ馬車を待たせたまま、名残惜しなごりそうに私の肩を抱いている。

「お父様、お母様。私もこちらでしつかり頑張りますから、どうか心配しないでください。……それよりも、どうかご無事で。私よりも、お父様やお母様のほうが大変な道になりますのですから」  
二人があんまり嘆くから、私までちよつぱり泣きそうになってしまった。けれどぐつとこらえて、にっこりと笑いかける。

涙に濡れた顔を上げて、二人が弱々しく微笑む。

「そう、ね。嘆いている場合ではなかったわ。悔やんでいる暇があるなら、前を向いて頑張らないと。ふふ、あなたにそれを教えられるなんて、思いもしなかったわ。アンヌマリー、いつの間にかあなたはこんなに強くなっていたのね」

「そうだな。この短い間に、お前はずいぶんと立派になった。それを嬉しく思う」

そうして三人で、ぎゅつと抱きしめ合う。最後のあいさつを済ませると、両親は幾度も振り返りながら馬車に乗り込んでいった。目を赤くしたまま、それでも笑顔で二人は私に手を振る。

「元気でね、アンヌマリー！　すぐにあなたを迎えに行くからね！」

「体には気をつけるんだぞ！　サレイユの屋敷にあてて、手紙を書くからな！」

「お父様、お母様、どうかお元気で！」

引き裂かれるような悲しみを感じていたけれど、私は自分の足でしつかりと立ち、去っていく馬車を見送ることができた。たぶん、もう一つの記憶の分、少しだけ私は強くなっていたのだろう。

一人で元気にたくましく暮らしていた大学生としての記憶の分だけ。

でも両親は、この記憶のことを知らない。何がどうなっているのかがはつきりするまでは、この記憶については伏せておいたほうがいいだろう。そう考えて黙っていたのだ。

この記憶について、明かしておいたほうが良かったかな。そうすればお父様とお母様は、もっと安心して旅立てたかな。

そんなことを思いながら、どんどん遠ざかる馬車をじっと見つめ続けていた。

両親が旅立った少し後、また馬車がやってきた。こちらはサレイユの屋敷からやってきた、私を迎えにきた馬車だ。御者に会釈して、一人で馬車に乗り込む。大きな革のトランクだけを持って。サレイユの屋敷はどんなところなのだろう。メイドとしての暮らしは、どんなものになるのだろうか。期待とちよつぴりの不安を感じながら、馬車に揺られ続ける。

そうしてたどり着いたサレイユの屋敷は、古く落ち着いた雰囲気の間所だった。新興の家だったミルランの屋敷とは違い、長い歴史を感じさせる。

屋敷の前で馬車を降りた私を、メイド服の中年女性が出迎えてくれた。背が高くがっしりした、中々の美人だ。彼女は歓迎するような笑みを浮かべて、口を開いた。

「よく来たね、アンヌマリ。あたしはイネス、こここのメイド長さ」

「よ、よろしく願います！」

返事をする自分の声は、面白いくらいに裏返ってしまっていた。緊張しているとはいえ、これはない。そう思いつつ、一気に言い切る。

「あの、私はこの間まで貴族として暮らしていました。でも、精いっぱいメイドとして頑張りたい

と思っています。その、家事の基本も……多少なら、分かると思いますので！ ですから、一人前のメイドになれるよう、どうかご指導のほど、お願いします！」

道々馬車の中で考えているうちに、気がついてしまったことがあった。確かに私は家事の経験がある。でもそれは、洗濯機やら掃除機やらの文明の利器に助けられてのものだ。そういったもの全くないこの辺りでの暮らして、私の経験が役に立つかは分からない。

もしかしたら私は、見事なまでに足手まといになってしまいかもしれない。そう思ったら、少し怖くなった。でもすぐに考え直した。役に立てないのなら、役に立てるようになればいいだけだ。

幸い、私を出迎えてくれたメイド長のイネスは親切な人のように見えた。彼女にすっかり指導してもらえれば、私だってきつとやっつけていける。

深呼吸して、どきどきする胸をなだめながらイネスの返事を待つ。彼女は明るい青の目をまん丸にしていたが、やがて心配そうに声をかけてきた。

「ちょ、ちょっと落ち着きな。……その、無理はしてないかい？ ずいぶんと意気込んでいるようだけど」

力強くうなずくと、イネスはまた目を丸くした。それから、一転して苦笑する。

「実はね、元貴族のお嬢様が来ると聞いて少し困ってたんだよ。そんな子に、本当にメイドが務まるのかって。そうしてやってきたのは、可愛らしくて上品な、どこからどう見ても令嬢そのものの娘さんだった。ああこれは厄介やっかいなことになるだろうなって、そう思ってたんだ。きつとめそめそされるだろうな、ってね」

そこまで言って、彼女はふっと目を細める。

「でも、どうやら取り越し苦労だったみたいだね。アンヌマリー。あんだ、やる気と根性はありそうだしね。これならあたしとしても、教えがいがあるつてもんだよ」

イネスはうんうんとうなずきながら、嬉しそうな目で私を見ている。夕日に照らされて、彼女の赤みがかった栗色の髪が力強く輝いていた。

「これだけ骨のありそうな新人は、久しぶりだ。あんだならきつと、立派にメイドとしての仕事もこなせるようになるさ」

「あ、ありがとうございます……」

褒められて照れる私がおかしかったのか、イネスは豪快に笑う。

「それより、こんなところで立ち話もなんだし、屋敷を案内しよう。ついておいで」

大きな革のトランクを手にして、彼女の後に続く。やはり落ち着いた雰囲気おもちゃの母屋を、順に歩いていった。時々すれ違う使用人たちは、みんな興味深そうに私を見ていた。新人が珍しいのか、それとも私の事情が知れ渡っているのか。正直、落ち着かない。

最後にイネスは、母屋の裏手にある建物に私を連れていった。こちらは比較的新しい、飾り気のない建物だ。その一室の扉を開けて、彼女はこちらに向き直る。

「ほら、今日からここがあんたの部屋だよ」

少し緊張しながら、その部屋に足を踏み入れる。部屋の中には質素なベッドが置かれ、小さいタンスが置かれていた。壁には作り付けのクローゼットがあるし、別の壁には小さな鏡がかけられている。決して広くはないけれど、居心地のよさそうな部屋だった。

「必要なものはそろってはさ。足りなきゃあたしに言っとくれ。食事はこの棟……使用人棟の

食堂でとつてもいいし、部屋に運んでもいい。料理長の邪魔をしなければ、母屋の厨房ちゅうぼうも使えるよ」

部屋の中を見渡しながらそこまで一気に言い切ったイネスが、ふとこちらに歩み寄ってきた。そっと顔を寄せてきて、小声でささやく。

「それでね、一つだけ言っておかないといけないことがあってね。……実は、元貴族がメイドとしてやってくるって聞いてから、妙にぴりぴりしているメイドが何人かいるんだよ。あの感じだと、あんたのことを目の敵かたきにしてつかかってくるかもしれない」

彼女の説明によると、ここの屋敷のメイドのほとんどは、近隣の村や町から集めた平民なのだそう。見た目の良い者をよりすぐって最低限の行儀作法を仕込んでから、メイドとして働かせているらしい。元がつくとはいえ貴族の出なのは、私だけなのだ。

「でも、どうして元貴族だと目の敵かたきにされるのでしょうか……?」

「そこところは、あたしにもよく分からないんだ。無理やり問い詰める訳にもいかないしねえ」  
イネスはため息をついて、肩をすくめてみせた。

「まあ、あたしも目を光らせておかし、そうおおごとにはならないとは思うけど……困ったら、いつでも遠慮せず言っておくれよ」

考え込むような顔でそう言つて、イネスは微笑んだ。さっきまでの豪快で威勢のいい笑いではなく、母親のように慈愛に満ちた表情だった。彼女もついていてくれるのだし、前向きに頑張ろう。身分やら何やらで多少行き違いがあっても、じっくり話していけばきっと何とかなる。

「それじゃ、明日からよろしく頼むよアンヌマリー。明日の朝、みんなと顔合わせをしよう。制服

を着て、一階のホールにおいて。メイドたちは、毎朝そこに集まって打ち合わせをするから」

そう言つて、イネスは部屋を出ていった。一人になって、もう一度周囲を見渡してみる。見知らぬ部屋、でも今日からはここが私の部屋だ。両親と離れ離れになったのは心細いけれど、イネスはとっても頼りになりそうだ。

とはいえ、イネスの忠告は気になっていた。私の新しい生活は、じゅんぷうまんぼん順風満帆とはいかないのかもしれない。革のトランクをそつと床に置いて、気合を入れるようにゆつくりと深呼吸した。



そして次の日の朝、ちよつとわくわくしながら、生まれて初めてメイド服に袖そでを通した。スカートの長いクラシッくなタイプで、結構上質の生地だ。着丈や袖丈は問題ないけれど、少し胴回りが余りぎみかもしれない。

メイド服の上からエプロンをつけ、後ろのリボンをきつちりと結ぶ。それから、くるりと回つてみた。多少大きいけれど、エプロンをつけていれば問題なさそうだ。

そうして、軽い足取りで部屋を出る。私がホールに顔を出すと、そこには既にメイドたちが集まっていた。年頃の女性が半分、中年女性が半分といったところだ。こここのメイドは見た目で選ばれていると聞いてはいたけれど、確かに見事なまでに美人ぞろいだ。

彼女たちはいくつかのグループに分かれて小声でお喋りをしていたが、私の姿を見るとみんなびたりと黙ってしまった。視線が一斉にこちらを向く。

「おや、来たねアンヌマリー。みんな、彼女を紹介するよ！」

ホールの中央に立つイネスが、私を手招きしていた。そのまま彼女の隣に歩み寄ると、彼女は明るい声で話し始めた。

その間、メイドたちは興味と警戒が混ざったような目で私を眺めていた。私がどんな人間なのか、自分たちの仲間としてやっていけるのかといったことを見定めようとしているらしい。

「……とまあ、こういう訳さ。アンヌマリーは元令嬢だけれど、やる気は人一倍あるみたいだからね。みんな、元の身分なんて気にせずに仲良くしておやり」

元気のいいイネスの声に、あいまいな同意の声がいくつか返ってくる。イネスは少しも気にしていない顔で、話を締めくくった。

「それじゃあ、あたしは一足先に行ってるよ。今のうちに、アンヌマリーと話しておきな」

そう言っつて、イネスは母屋のほうに向かっていった。そうして残された私は、戸惑いながら他のメイドたちをそろそろと見渡す。

彼女たちは、みんな遠巻きに私を眺めていた。私に話しかけようか、それとも放っておいて仕事に行こうか迷っているような顔だ。

勇気を出して、こちらから話しかけてみようかな。そう思いはしたものの、どう声をかけていいか分からなかった。こういう時は世間話が定番だけれど、ちょうどいい話題が思いつかない。

そうして困り果てていたら、いきなりホールに明るい声が響き渡った。

「あつ、ええと……アンヌマリー……さん？　アタシ、クローエっていうの。よろしくね！」

可愛らしいメイドが跳ねるような足取りで、こちらに駆け寄ってきた。

年の頃は私と同じくらいか、よく手入れされた銀色の髪と、黒に近い深い青の目をした、表情豊かな子だ。彼女は私のすぐ目の前までやってきて、につこり笑う。人懐ひとなつつこい犬に似ているかも。

「初めまして。さつきイネスさんから紹介してもらったけど、改めて名乗っておくわね。私はアンヌマリーよ。さんはいらないわ。以前の身分はともかく、今はもうあなたと同じメイドだもの。」

「……その代わり、私もクロエって呼んでいいかしら？」

どきどきしながらそう答えると、クロエはぱつと顔を輝かせた。

「うん、もつちろん！ あ、アタシちよつとなれなれしいって時々言われるんだけど、いきなり話しかけて大丈夫だった？」

なれなれしい、か。確かに、そういう見方もできるのだろう。けれどクロエは他のメイドたちの何とも言えない視線をもともせずに話しかけてくれたのだ。その積極性は、今の私にはとてもありがたいものだった。

「大丈夫どころか、あなたがそうやって話しかけてきてくれて嬉しかった。これからも、どんどん気にせずに話しかけてもらえると、もつと嬉しいわ」

彼女ともつと仲良くなりたいな、そんな思いを込めてそう言ってみる。返ってきたのは、とびきり素敵な笑顔だった。

「やったあ！ だったらアタシたち、友達ってことでいい？ 仲良くなれそうな気がするし」

「ええ、もちろんよ。こちらこそよろしくね。あなたは友達で、先輩だから。頼りにしてるわ」

「任せてよ！ ふふ、アタシが先輩かあ……ちよつとくすぐりたいね」

クロエはすつかりはしゃいでしまっていて、私の両手をしっかりとにぎってぶんぶんと振っている

る。ものすごくフレンドリーだ。そして彼女は、何かに気づいたように目を丸くする。

「うわ、手がすべすべ！ ……わあ、髪も綺麗 ……黒くてつやつやで、毛先も傷んでないし」

「あの、そう褒められるとちよっと恥ずかしいわ ……でも、その ……ありがとう」

「もしかして、アンヌマリーって照れ屋さん？」

「 ……自覚したことはなかったけど、そうかも。それより、あなたの髪もとっても綺麗よね」

「ふふっ、ありがとね。どれだけ忙しくても、髪の手入れだけは欠かさないんだ。 ……アナタって

元貴族っていうより、普通の女の子みたいだね。こんな話で盛り上がれるなんて思わなかった」

「そうよ、私は普通の女の子よ。もう貴族じゃないのだし、特別扱いはしないでね」

そんなくだらない会話をしながら、自然と緊張がほぐれていくのを感じていた。高校生の頃、よくこんな風に友達とじゃれあっていたなあ、そんなことを思い出しつつ。

しかしほっと息を吐いたその時、ホールの壁際にたたく数人のメイドたちの姿が目に入った。

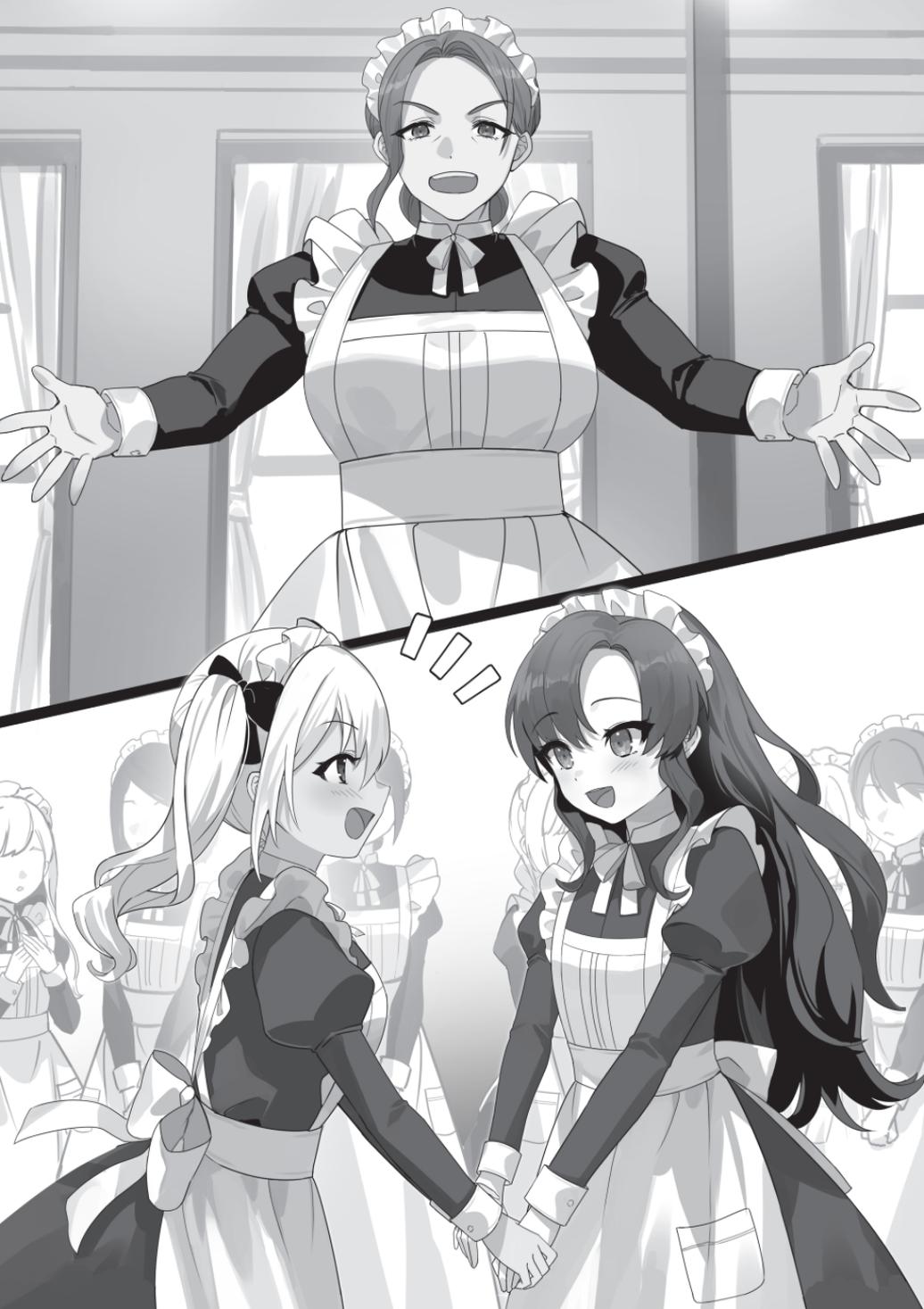
彼女たちは、ぞっとするような冷たい目で私だけを見ていた。昨日のイネスの忠告が、頭をよぎる。話し合っただけにかなる相手だとは思えない。あれは、はっきりとした敵意だ。

「どうしたの、アンヌマリー？ ……あ、あの子たちか」

私が見ているものに気づいたのか、クロエが声をひそめる。

「あの子たち、貴族の世界に憧れがあるみたい。玉の輿を狙ってる子もいるの。 ……だから、アナタのことが気に入らないんじゃないかな。えっと、生まれとか教養とか？ あの子たちがとっても欲しくてたまらないものを、アナタはもう持つてるからだと思う。たぶんだけど」

「そうだったの ……だったらいつか、私自身を見てもらえるように、気長に努力するしかないわ



ね」

「……アナタって、前向きなんだね。その気持ち、あの子たちにも伝わるといいね」

クロエが励ますような声でつぶやいて、それから一転して明るく笑う。

「ねえ、そろそろ仕事に行こうよ。アタシも今日は同じ作業の担当だから、一緒に、ね」

「あ、うん、そうね」

腕を組んできたクロエに引つ張られるようにして、二人で歩き出す。背中に感じるじつとりとした視線を、ことさらに無視しながら。

怖くないと言ったら、嘘になる。でも、だからといってひるんで縮こまっていたくはなかった。

私は一人ではない。イネスも彼女たちに気をつけてくれると言っていたし、クロエという友達もできた。それにきつと、他にも力になってくれる人がいるはずだ。

だから胸を張って、前に進み続けた。腕に感じるクロエの温<sup>ぬ</sup>もりに、すがるようにして。



そうして、私はその日からメイドとして働き始めた。予想通り、最初はかなりてこずった。

掃除はまだ何とかなっていた。ほうきで掃き掃除、雑巾<sup>ぞうえん</sup>で拭き掃除、それにはたきやモップかけ。どれも、一応経験はある。だからやり方だけは分かっていた。やり方、だけは。

しかしながら、屋敷はとにかく広かった。他のメイドたちは慣れているからか楽々こなしていたけれど、不慣れな私は一日ぶっ続けて掃除しただけで、全身筋肉痛になってしまった。

そしてそれ以上に、洗濯は大変だった。だって、たらいに洗濯板って。実物は初めて見た。しかも洗濯の間ずつとかがんでいるから体が痛くなるし、明らかに私だけ手際てぎわが悪いし。最初はみんなこんなもんだよって、イネスは慰めてくれたけど。

他のメイドたちの憐れあはれむような視線に見守られながら、懸命に頑張っってどうにかこうにか作業を覚えていく。そんな私の前に、新たな試練が立ちはだかつていた。

それは、かまどの扱い方だった。食事は料理長たちが作るので、私たちメイドが料理をする必要はない。それでも必要に応じてお湯を沸かしたりすることはあるから、覚えておくに越したことはない。

「ほら、思い切ったまきて薪を押し込みな。かまどの奥までしっかりね」

「頑張れ、アンヌマリー！ いい感じだよ！」

苦笑するイネスと応援するクロエに見守られながら、必死にかまどの火を調節する。火力を上げる時は薪を入れて、下げる時は金属の火かき棒で薪を引っ張り出す。単純明快。

でも正直怖い。火が大きくて怖い。かといって小さくすると、いつまでたってもお湯が沸かないし。かまどの上にかけてやかんは、さつきからうんともすんとも言わなかった。

おっかなびっくり作業していたら、クロエがやけに明るく、思わせぶりに言った。

「アタシ、アンヌマリーの沸かしたお湯でお茶が飲みたいなあ。いいお茶菓子、持ってるんだ」

「おや、それはいいねえ。とっておきの茶葉があるし、少し休んでおやつにしたいねえ」

二人のそんな言葉を聞いた瞬間、私の手は勝手に動いていた。お茶とおやつ。その魅惑的な響きが、火への恐怖に打ち勝ってしまったのだ。

「……見違えるくらい、動きが良くなったねえ。そんなにおやつを食べたかったのかねえ」

「……もしかしてアンヌマリーって、食い意地……張ってるのかな？」

そうつぶやく二人に答えるかのように、やかんの注ぎ口からは勢いよく湯気が吹き出していた。

そんな風に毎日一生懸命に頑張っていたのが良かったのか、他のメイドたちや使用人たちとも徐々に打ち解けることができていた。もつとも、私を敵視しているらしい数人のメイドだけは、相変わらずだったけれど。何度か声をかけてはみたものの、ろくに相手にしてもらえなかったのだ。ちよっぴり低空飛行ではあったけれど、私はどうにかこうにかメイドとして頑張れていた。しかし一つだけ、どうしても重大な問題が立ちはだかっていた。

「はあ……物足りない……」

このところ私は、毎晩のようにため息をつくようになっていたのだ。

私の中にある、もう一つの記憶。それのおかげで、少なくとも私は役立たずになることだけは避けられた。しかしその記憶は、とんでもない副作用を引き起こしていたのだった。

昼間は仕事で忙しくしているから、余計なことを考えずに済んでいた。でもこうして自室に戻って一人ぼんやりしていると、決まって同じことを考えるようになってしまったのだ。

「……味噌汁が……飲みたい……とつても飲みたい……」

あったかい味噌汁が恋しい。鰹節かつおぶしと煮干しだしで出汁を取った、ちよっぴり素朴なお味噌汁。昆布

出汁も上品でいいな。具は、今は豆腐とワカメの気分かなあ。柔らかい豆腐とこりこりしたワカメの歯ごたえのハーモニーがたまらない。

味噌汁とくれば、ご飯も欠かせない。どうせならおにぎりが食べたい。ふっくら炊き立てのご飯を、手に塩をちよつとつけて、あちあち言いながらにぎつたつやつやのおにぎりがいい。軽くあぶつてふわんといいい香りになった海苔を、食べる直前に巻いて。具材は……スタンダードに梅干しかな。鮭もいいかも。明太子やツナマヨも捨てがたい。

付け合わせはお漬物。さわやかな浅漬けもいいし、味わい深いぬか漬けもいい。たくあん、柴漬け、野沢菜、キムチ……正直何でも合う。

「ああもう、思い出してたらお腹が空いてきた……晩ご飯、ちゃんと食べたのに……」  
ベッドに腰かけて頭を抱えながら、今度はさっきの夕食のことを思い出してみる。トマトとズッキーニ、それにオクラの入った具だくさんのコンソメスープ、ライ麦パンとチーズ。

うん、あれはおいしかった。そもそも、ここの食事はいつもおいしい。裕福な男爵家の令嬢として暮らしていた頃の食事に比べるとかなり質素だけれど、味も栄養も量も文句なしだ。何でも、私たち使用人のまかないについては料理長に一任されているらしい。彼には感謝しなくては。

思い返せばミルラン男爵家に生まれてから十六年、私が食べてきたのは全て洋食だった。コンソメ味にトマト味、塩バター味にチーズ味にハーブにスパイス、それとデミグラスとかのソース。だいたいみんな、そんな感じの味だった。

でも、私が今食べたいのはそのどれでもない。

「晩ご飯……おいしかった……すつごくおいしかったけれど、やつぱり和食が食べたい……」

そうして、また思考が同じところに戻ってくる。味噌汁、おにぎり、お漬物。さらに色々なメニューが、ものすごい勢いで頭の中を駆け巡る。

男爵令嬢として暮らしていた頃、ずっと私は物足りなさを感じていた。その正体はこれだったのだ。私はもう一つの記憶がよみがえる前から、無意識レベルで和食を欲していたのだ。

「……食いしん坊にもほどがあるわね、私……。でも、そろそろ我慢の限界……。なんとかしなくちゃ……」

このまま放っておいたら、私は昼夜を問わず味噌汁の幻を見るようになってしまふかもしれない。その前に、どうにかしなくては。

和食といえば、やはり味噌や醤油だ。しかし私が暮らしているこの辺りには、味噌も醤油も存在しない。少なくともここ十六年、見たことも聞いたこともない。

「……ないのなら、作ってみよう、調味料。うん、それしかないわ」

味噌や醤油を一から作る。途方もない話だけれど、一つだけ当てがあった。

以前に大学で受けた、とある講義。私はそれを思い出していた。『伝統の食文化』と銘打ったその講義では、味噌や醤油といった調味料の作り方から、様々な加工食品の作り方まで、とにかく丁寧に丁寧に説明していた。ほぼ料理番組だった。

自他ともに認める食いしん坊の私は、講義のタイトルを聞いた瞬間に受講を決めた。それはもう真剣に講義を受けて、そして大いに満足した。ついでに、かなりの好成績を収めることもできた。

「ああ、あの講義のノートさえあれば……完璧かんぺきに作れるのに……」

両手で顔を覆おほって、深々とため息をつく。しかし、ないものを嘆いても仕方がない。必死に記憶

をたどり、講義の内容を思い出してみる。

「……確か、醤油より味噌のほうが作りやすかったような気がする。だったら、まずはそっちから取りかかってみよう。それに味噌が完成すれば、念願の味噌汁が飲めるし」

そう考えているうちに、自然と心が浮き立っていた。ずっと料理のことをぶつぶつとつぶやいていただけの状態から、やっと一歩前に進めた気がした。

「味噌の材料は……大豆と塩だったかな。この二つはここでも安く手に入るし、問題ないわね」

この辺りでも大豆は普通に食べられている。そして海が近いので、塩も多く流通している。

「材料、もう一つあったような……白くてふわふわした綿菓子みたいなのが。ああ、思い出した。コウジ、だわ」

よし、いい調子だ。笑みが浮かぶのを感じながら、どんどん講義の時の記憶をたどっていく。

「稲穂の表面に生えた黒い粉を、蒸した米に植えつけて作るのだったわね。写真も見たけど、黒い粉がびっしりと稲もみを覆っていて、なんだか不思議な感じだったわ。あんなもので調味料を作ろうだなんて、昔の人は面白いことを考えるなあって、そう思ったっけ」

ともかくも、味噌の材料は全て思い出せた。とても順調だ。しかし喜びにガッツポーズを決めた次の瞬間、頭を抱えてうずくまる。とんでもないことに気づいてしまったのだ。

「……ちょっと待って。ということは、あの黒い粉がついた稲穂がないとどうしようもないってことで……イコール、稲穂を一つずつ見て回って、黒い稲穂を地味に探すしかない……」

この辺りではリゾットにパエリア、それにピラフなんかがよく食べられている。そんなこともあって稲作も盛んだ。細長い米から見慣れた短い米まで、色んな種類の米が育てられている。

頭を抱えたまま、ちらりと窓のほうに目をやった。今は夜なので見えなくても、そちらにある  
明るい森のすぐ向こうには、一面に田んぼが広がっているのだ。

そして今は実りの秋、そろそろ稲刈りの時期だ。つまり、黒い稲穂探しを決断するなら今しかない。今を逃せば、次は一年先だ。そんなに待てない。

「近くに田んぼがあるのはいいけれど……黒い稲穂って、どれくらい見つかりにくいのかしら……」

金色の稲穂がびっしりと実っている広い田んぼの中を、目的の稲穂が見つかるまでさまよう。想像しただけでうんざりするような作業だった。

やっぱりやめようかなと、そんな弱気な考えが頭をよぎる。両手で頬をほおぼちんと叩いて、自分に言い聞かせた。

「駄目よ、アンヌマリー。ここであきらめたら、もう二度と味噌汁は飲めない」

重々しくそう言って、ベッドから降りた。部屋の真ん中に立って、こぶしを高々と突き上げる。「こうなったら、何が何でも味噌汁を作ってみせるわ！そして、恋しい和食を再現するの！」

真夜中の静かな部屋の中で、私の抑え気味の決意表明は誰に聞かれることもなく消えていった。相づちを打つかのように、お腹の虫がまたきゅるりと情けなく鳴いていた。



その数日後、お休みの日。私は張り切って朝一番に屋敷を出て、その足で近くの田んぼに向かっ

た。田んぼの持ち主を見つけて、これこれこういうものを探しているのだと説明する。

私の話を聞いて、田んぼの持ち主は首をかしげていた。あからさまに、うさんくさげな目で私を見ていた。遠く異国に伝わる料理を作るのに必要なのだと言ったら、どうにか納得してくれた。

「稲穂を数本譲ってもらえることになったのはいいけれど……暑い……それに長いスカートで田んぼに入るのって、ものすごく動きづらい……」

ため息をつきながら、田んぼの中にそろそろと分け入っていく。稲を傷めないように気をつけながら稲穂を一つずつ見て回るのは、思った以上に骨の折れる作業だった。

今日は快晴で、秋だというのに暑くてたまらない。そして長くてたっぷりとしたスカートは、ちよつと目を離すと稲を豪快になぎ倒してしまう。しかも、ずつと中腰なのでとても疲れる。

「そのうち、もっと動きやすい服を買ったほうがいいかしら……外で動き回るたびにこれじゃあ、ちよつとね」

今私が着ているのは、屋敷のメイドの制服だった。家を出る時にできるだけ地味な私服を持ってきてはいたけれど、あれを着て田んぼにいたらものすごく目立つ。

貴族の地味な私服は、平民からすれば上等のおしゃれ着でしかないのだと、メイドになってようやくと理解できた。みんなの私服は、もつとずつと質素だったのだ。

ともかく、今は黒い稲穂を見つけなくては。一度伸びをして体をほぐしてから、またかがみ込む。「ない、ない、ない……いいえ、きつとどこかにあるわ。絶対に見つけて、おいしいお味噌汁を飲むんだから」

そんな言葉を呪文じゅもんのように小声でつぶやきながら、一つ一つ稲穂を見て回る。いつの間にか太陽

は頭の上に来ていて、頭や肩がじりじりと熱い。

「ふう、そろそろお昼にしましょうか。休憩もしたいし、いい感じにお腹も空いたし」

軽やかな足取りで田んぼを抜け出し、近くの大木の陰に歩いていく。そこに置いておいた荷物を探って、小ぶりの布包みを取り出した。

木の根に腰かけて布包みを開けると、中からは小箱が一つ出てくる。いそいそと蓋ふたを開けると、大きなおにぎりが二つと漬物が姿を見せた。朝早く起きて、自分で準備したお弁当だ。

「ああ……見てるだけで幸せ」

この辺りでは、お米をふっくらと炊いて食べるという習慣がない。リゾットみたいに芯が残ったままにするか、あるいはピラフみたいに思いっきり水分を飛ばしてばらばらにするかのどちらかだ。だからこのご飯も、一から自分で炊かなくてはいけなかった。当然ながら炊飯器なんてない。とはいえ、そこまで困りはしなかった。

というのも、大学生だった頃はいつも普通の鍋でお米を炊いていたからだ。一人分の米を炊くためだけに炊飯器を買うのももったいないなあと考えて、試しに鍋で炊いてみたら案外簡単だったのだ。洗い物も楽だし時々おこげも食べられるので、結局ずっと鍋で米を炊いていた。その経験がこんなところで活きるなんて。ほんと人生、何が役に立つかわからない。

そんなことを思い出しつつ、目の前の素朴なお弁当を眺める。うっとりとして、心ゆくまで。

おにぎりは白身魚の塩焼きをほぐして、白ゴマと一緒にご飯に混ぜ込んだものだ。ほんの少しだけオリーブオイルを混ぜてあるので冷めてもぱさつかないし、固くなりにくい。油を入れすぎるとまともにくくなるので注意だ。

本当は、海苔を巻いた具入りのおにぎりにしたかった。けれど梅干しも塩鮭もなかったし、それ以前に海苔がない。というかこの辺りでは、海藻を食べる習慣すらないのかも。この十六年、海藻のたぐいを食べた覚えがないし。

なので、こうやって混ぜご飯のおにぎりにしたのだ。これなら比較的簡単にそれらしいものができる。つやつやと光るお米、その間から顔をのぞかせるお魚とゴマ。うん、おいしそう。

お漬物は塩と砂糖、それとビールで一晩漬けたキュウリとナスだ。どちらも食べやすいステイック状に切つてある。ビールは安価でみんな水みたいに飲んでいるから、料理にも気軽に使える。

「それでは、いよいよ……いただきます」

わくわくしながら両手を合わせて、いよいよ食事に取りかかる。まずはおにぎりをがぶり。ふつくと炊けたご飯に、淡白でほのかに磯の香りがする魚。そこに白ゴマが香ばしい風味とぶちぶちした食感を添えている。

「おいしい……芯のないお米……最高……柔らかいのに噛み応えがあつて、ほんのり甘くてしょっぱくて……あ、嬉しすぎてちょっと泣けてきた」

思わず目を閉じて、おにぎりの味を存分に堪能する。お米の甘さと魚の塩気のハーモニーが最高だ。おにぎりつて、ここまでおいしいものだったかな。一人ぷるぷると喜びに打ち震えながら、さらに食べ進めていった。

漬物も、目分量で適当に漬けた割にはいい感じに仕上がっていた。ごく普通の浅漬けにビールを入れると、不思議なくらいに複雑でコクのある、妙に上等そうな味に化けるのだ。今度は酢やシウウガ、ニンニクなんかを利かせてみてもいいかも。唐辛子の輪切りもいいな。

きっと今の私は、めいっばい顔が緩ゆるんでしまっていると思う。でもいいんだ、誰も見ていないし。今はこのおいしいさに、心ゆくまで浸ひたっていたい。

「ああ、久しぶりの和食……とってもおいしい……ここにお味噌汁があつたら、言うことなしなのに。これは何が何でも、黒い稲穂を見つけれしかないわね」

決意も新たに、あつという間におにぎりを一個べろりと平らげる。水筒に入れたお茶を飲んで、一息ついた。辺りに人の気配はなく、遠くから鳥の声がする。

「のどかね……おいしいお弁当を食べるにはぴったりの場所だったかも」  
しみじみとつぶやいたその時、いきなり近くで声が出た。

「お前、さつきから何をしているのだ？」

「きゃっ!?」

油断し切っていたところに背後からいきなり声をかけられて、びっくりして飛び上がる。どうにかお弁当箱をひっくり返さずに済んでほっとしていると、背後の大木を回り込むようにして足音が近づいてきた。

「田の中を歩き回り、木陰で食事とは……農夫ならともかく、なぜメイドがそんなことをしているのだ。訳が分からん」

そうして私の前に姿を現したのは、貴族にしか見えない青年だった。

「あの、ええと……」

無意識のうちにお弁当箱をしっかりと抱えて、青年を見上げる。

私よりちょっと年上か、それとも同年代か。割とシンプルな貴族の略装をまとっている彼は、一

応かなりの美形ではあった。少々偉そうではあるけれど。

軽く波打った淡い金髪、アメジストのような鮮やかな紫むらさきの目。少々気の強そうな目つきに、自信たっぷり引き締められた口元。気品にあふれるその姿は、田んぼにはびっくりするほど似合っていないかった。

そもそもどうして、こんなところに貴族がいるのだろう。というか、彼はどの誰なのだろう。面倒なことにならないといいなあと思いながら立ち上がり、礼儀正しく頭を下げる。

「今日は休みをいただいているのです。訳あって、少々探し物をしておりました」

「探し物？ 田の中に、そのようなものがあるというのか」

「ええ、その……少々、個人的な理由があります」

田んぼに、個人的な探し物。我ながら苦しい言い訳だとは思ふ。実際彼も、なんだそれとは言わんばかりの顔で眉まゆをひそめていた。

「……まあ、いい。お前、アンヌマリーだろう。伯父上……サレイユ伯爵のところおじょうに新しく雇われたと聞いているぞ」

意外な人物の名前が出てきたことに驚いて、目を丸くする。どうやら目の前の彼は、私の主あるじであるサレイユ伯爵の甥おとこらしい。

「私はディオーン・サレイユ、まだ十八歳ではあるが、いずれ伯父上の跡を継ぐことになる者だ。つまり、そのうち私はお前の主人となる。そんなこともあって私は伯父上のところにしばしば滞在しているから、また顔を合わせることもあるかもしれないな」

やはり堂々と言い切った彼は、どことなく得意げな顔をしていた。そんな彼の姿は、やはり偉そ



うではあるけれど、同時に微笑ましくもあつた。何というか、褒めて褒めてと胸を張る子供を思い起こさせるのだ。どうも彼は、内心が割と顔に出るタイプらしい。

それはそうとして、ここはどう答えば失礼にならないのだろうか。私の雇い主の甥で、いずれ私の主になる者。そう言われても、ぴんとこないのだ。誰かに仕えるとか、初めてだし。

そもそも、まだ主人たるサレイユ伯爵にすら会つたことがない。彼は私室からあまり出てこない上、身の回りの世話は年長のメイドたちが担当している。おかげで私は日々のびのびと、気楽に働くことができていたのだ。

困惑をごまかすように、また優雅に頭を下げた。ゆっくりと顔を上げると、やけに熱心にこちらを見ているディオオンと目が合う。

「あ、あの？ どうかされましたか？」

その奇妙に熱い視線にどぎまぎしながら、そう尋ねる。その時気がついた。彼は、私が手にしたお弁当箱を見つめていたのだ。

「見たことのない料理のようだが、それはいったい何だ？ ずいぶんと幸せそうにそれを食べていたようだが……そんなに美味なのだろうか？」

「……炊いた米に焼いた魚を混ぜて丸くにぎつた、おにぎりと呼ばれるものです。こちらは漬物……野菜のピクルスのようなものです」

そう説明してやると、ディオオンは身を乗り出すようにしてお弁当箱の中をのぞき込んできた。彼はおにぎりと漬物がかなり気になっているらしい。その目が、きらきらと輝いている。

「……あの、ディオオン様」

「なんだ、アンヌマリー」

どうも彼は、さつきからやけにそわそわしているように思える。まさかそんなはずはないよねと思いつつ、社交辞令として一応尋ねてみた。

「よければ少し、味見されますか？」

「まあおう」

まさかの即答だった。もしかして彼はお腹が空いているんだらうか。でもそれなら、サレイユの屋敷に戻ればいいだけのことなのに。一面の田んぼの向こうに見えている森をぐるっと回り込めば、もう屋敷は目と鼻の先だ。

けれど味見するかと言い出したのは私だし、腹ぺこかもしれない人間を放っておくのも落ち着かない。仕方なく、二つ目のおにぎりを半分に分けて、ディオオンに差し出した。このおにぎりは大きいから、半分でも十分に小腹は満たせるだろう。

しかしディオオンは目を真ん丸にして、差し出されたおにぎりをじっと見つめるだけだった。

「……皿は？ フォークはないのか？」

「ございません。これは手でつかむのが、正しい作法なのです」

きっぱりとそう答えたら、彼はさらに戸惑った様子を見せた。それもそうか。貴族が素手<sup>すて</sup>でつかむ食材といったら、せいぜいブドウなどの小さな果物かパンくらいのものだ。こんな風に手が汚れる、それも結構な大きさのあるものを、手づかみで丸かじりすることなんてまずない。

やっぱ無理だよね、と半分のおにぎりを引つ込めようとしたとたん、すっと彼の手が伸びてきた。指の長い綺麗な手が、この上なく優雅なしぐさでおにぎりをつかむ。美形で上品でちよっぴり

偉そうな雰囲気のの貴族と、素朴そのもののおにぎり、しかも半分だけ。何ともミスマッチだ。

「……米……にしては、妙にもっちりとしているな。力を入れてもばらけない……」

ふつくと炊き上がったご飯は、その存在そのものが彼にとっては珍しいものだったらしい。眉まゆ間にしわを寄せて、間近でおにぎりをじっと観察している。そのとても真剣な表情に、ついうっかり笑いそうになる。

唇をぎゅつと引き結んで笑いをこらえながら、ディオンの反応をうかがう。笑ってはいけないと思うほど、笑いが勝手にこみ上げてくる。彼にばれないように、こっそりと自分の太ももをつねって耐えた。

「米と……魚か。それにゴマだな。ただ混ぜてあるだけのようにも見えるが……本当に美味なのか？ お前はおいしいおいしいと連呼していたが」

彼はそんなことを言いながら、疑いの目をこちらに向けている。どうやら彼は、さっきの私の独り言を聞いていたようだった。で、気になって実物を見に来たものの、そんなにおいしそうに見えなくて疑っている、そんなところだろう。

疑うなら食べなくて結構ですよ、という言葉が喉元まで出かかっているのを押し戻して、礼儀正しく頭を下げる。

「はい。少なくとも私は、とても美味なものだと思っています」

そう答えると、ディオンはふうむ、などとうなりながら、おにぎりを一口大に割ろうとした。ひとまず食べてみようと思っただけ。そんな彼を、あわてて押しとどめる。

「あの、実はこのおにぎりは、こうやって食べるのが正しい作法なんです」

お手本とばかりに、自分の分のおにぎりを一口かじってみせた。ディオオンがまた目を見開く。外で食べるおにぎりの醍醐味は、やはり丸かじりだと思う。かじって食べるとさらにおいしく感じられる気がするのだ。その感覚が、貴族であるディオオンに通じるかは怪しいけれど。

ディオオンはおにぎりをつかんだまま固まっていたけれど、やがて顔をきりりと引きしめて、ぱくりとおにぎりにかじりついた。その表情が、目まぐるしく変わっていく。戸惑いから驚きに、そして、子供のような無垢な笑みに。弁当箱を抱えたまま、思わず見とれる。

そんな見事な笑顔のまま、彼は感想を口にする。

「ほう、これは……素朴だが、悪くないな」

ちよっぴり偉そうな口調ではあるけれど、彼がおにぎりを気に入ったことは一目瞭然だった。分かりやすいなあ、この人。

彼はもう一口おにぎりを頬張って、それから私の弁当箱に視線を落とす。

「そちらの野菜……漬物、だったか？ そちらも、一口分けてくれ」

「構いませんが、手が汚れますよ？」

「今さらだ」

どうやら彼は、意外と思いい切りがいらしい。弁当箱を差し出すと、手を伸ばしてキュウリの漬物のひとかけをつまみ上げ、上品に口に運んだ。そうしてまた、目を丸くした。

「この風味は何だ？ さっぱりとしているのに、味に深みがあるような……ただのピクルスとは思えない」

「隠し味に、ビールを使いましたので」

ディオオンが驚いているのが面白くて、笑いをこらえながらそう答える。彼はおにぎりと漬物と私を順に見て、おそろおそろ問いかけてきた。

「……もしかしてこれらの料理は、お前が作ったのか？」

「はい。これくらいなら、すぐに作れますから」

「まさか。メイドがここまでものを作るなど、到底信じられない」

うなずいた私に、ディオオンがすかさず言葉を返す。そんなに思いつきり否定しなくてもいいだろうに。おにぎりなんて、米さえ炊ければ幼稚園児でも作れる。まあ、料理の味を褒めてもらったと言えなくもないけれど。

私がちよつぱり気を悪くしていることにも気づいていないのか、彼は眉間にしわを寄せて独り言のようにつぶやき始めた。

「これだけのものを、しかもすぐに作る……料理人でもないというのに、か……そもそも、お前は男爵家の娘で、料理などできないはずだ。それらしくないせいですっかり忘れていたが」

男爵家の娘らしくない。そんな最後の一言にちよつぱりかちんときた。もう一つの記憶がよみがえってから、確かに自分がちよつぱり令嬢らしくなくなつたというか、すっかり庶民っぽくなつたなあととは思っていた。けれど正面切つてそう言われると、やっぱりちよつと嬉しくない。

腹の中で色々と考えつつ、ありつたけの自制心をかき集めてあいまいに微笑む。彼は主であるサレイユ伯爵の甥で、私はただの使用人だ。おとなしくしておくに越したことはない。

ディオオンは、真剣に考えこんでいるような顔でおにぎりを食べ終えた。それからはずと我に返つたように目をまたたいて、こちらに向き直る。

「ふむ。……美味だった。ありがとう、アンヌマリー」

とても素直な礼の言葉が返ってきたことにびっくりしたせいで、とっさに言葉が出なかった。ひとまずべこりと、また頭を下げる。そうしたら上から、こんな言葉が降ってきた。

「また機会があれば、お前の料理を食べさせてくれ。興味がわいた」

やっぱり面倒なことになってしまったみたいだなと、下を向いたまままぢよつと顔をしかめる。彼は悪い人ではないと思うけれど、彼はサレイユ伯爵の甥で、いずれ私の主になる。つまり私は、彼の前ではメイドらしくおとなしくしていなければならぬ。そうやってかしこまっているのは、少し窮屈だと思えてならなかった。

「分かりました。またいずれ」

そんなことを考えながら、顔を上げて礼儀正しく答える。ディオンはそれを見て、嬉しそうな顔になった。ああ、この人は本当におにぎりを気に入ったんだなあと、ふとそう思った。彼にはあまり近づきたくない、でも彼のこの笑顔は見てみたい。そんな相反する気持ちに、戸惑いを覚えた。

「ありがとう。それでは、私はもう行く。お前の個人的な探し物を邪魔しては悪いからな」

それだけ言い残して、彼はサレイユの屋敷のほうに歩いていった。その背中が遠ざかり、森の向こうに消えていく。

そうして一人になってから、こっそりと口の中だけでつぶやく。

「……結局、どうして彼はこんなところにいたのかしら。そしていったい、何がしたかったのかしら。おにぎりにつられて近づいてきたのだとしても、それ以前にこんな田んぼだけのところに来ていた理由が分からないし……」

深々と息を吐いて、天を仰いだ。雲一つない、吸い込まれるように高い青空だ。

「……何だか、白昼夢でも見たような気分だわ……」

小さく息を吐いて、手にした弁当箱に視線を落とす。さっき私がかじってみせたおにぎりの残りが、先ほどの出来事が夢ではなかったということをはっきりと物語っていた。

何とも言えない落ち着かない気分で残りのお弁当を食べ終えて、気を取り直して探し物に戻る。けれど自然と、またディオンのことを考えてしまっていた。

ディオンのどういう人物なのか、やっぱりよく分からない。偉そうにふるまっていた割には素直に礼を言ってくるし。令嬢らしくないなどとデリカシーのないことを言っておきながら、探し物の邪魔をしないでいようと考えるくらいには気遣いができるし。

そして何より、おにぎりを食べていた時のあの顔。子供のように無邪気な、嬉しそうなあの顔。「……まあ、考えても仕方ないわね……どうせ、彼と深く関わることもなくてまづないと思うし。もしかしたらもう一度くらい、料理をふるまうことになるのかもしれないけれど、ね」

苦笑しながら視線をそらす。そうして、目を丸くした。黄金色の稲穂の海の中に、一筋の黒がずっと伸びていたのだ。

飛びつくようにその黒の前にかがみ込み、ぐっと顔を寄せる。垂れ下がる稲穂の粒には、真っ黒い粉のようなものがべったりとくっついていていた。間違いない、講義で見たものと同じだ。

「あった！」

午前中いっぱい探しても見つからなかったものが、ディオンの出会った直後に見つかった。まさ

か彼は、幸運の女神だったり……。

「そんなはずないわね。ただの偶然。そうに決まってるわ」

用意してきたはさみで注意深く稲穂を切り落とし、ハンカチでくるんだ。頭の中に妙にちらつくディオンの面影を無視しながら、足取りも勇ましく屋敷へと戻っていった。



黒い稲穂を手に、厨房に駆け込む。今の時間なら、まだ厨房は空いている。料理長たちが夕食の準備を始める前に、大急ぎで作業を済ませてしまわないと。

これから、味噌の材料の一つであるコウジを作るのだ。かつて受けた講義『伝統の食文化』、その中で聞いたことを必死に思い出しながら、厨房の隅でごそごと作業を始める。

「……まずはコウジを育てるための培地として、蒸した玄米を用意する」

稲穂から最初のコウジを作る時は玄米のほうがいいと聞いた覚えがあるので、今回は玄米を用意した。今朝屋敷を出る時に水に浸けておいたものを、蒸して冷ます。

「そこに、アルカリ性の灰を混ぜて余計な菌を殺す。……コウジも死んだりしないわよね？」

これで合っているのか、正直自信はない。コウジの培養とか選別は、普通なら実験室で行うような手順だ。でもずっと昔は、こうやって灰を使っていたらしい。

これでうまくいくかどうかは分からない。でも私は、ひたすら突き進むしかない。全ては味噌のため、和食のため。

「蒸した玄米と灰を混ぜたものを木箱に敷き詰めて、稲穂の黒い粒を上にはらまく。濡らして絞った布巾を木箱にかぶせて、湿気を補う」

そうしていると、足音が聞こえてきた。まずい、料理長たちがやってきたのかもしれない。彼らが仕事を始めたら、私は厨房から出ていかないといけない。急がないと。

少し焦りながら、小さな火鉢にほんの少しだけ炭をいけて、灰をかぶせて温度を調節する。

「木箱を火鉢に乗せたら、ひとまず完成……ほんのりあつたかいくらいの温度を保てばいいのよね……高温になると、コウジがやられるから」

どうにかこうにかやりきった。ほうと息を吐いて、両手で胸を押さえる。

「温度と湿度を保ちながら、一週間ほど待つ……あとは、天に祈るしかないわね……」

「おい」

厨房の反対側から、ぶっきらぼうな声がした。そちらを向くと、腕組みして椅子いすに腰かけた料理長と目が合った。

貴族のお屋敷の料理長というよりもラーメン店の店主のような雰囲気のごつい中年男性である彼は、眉間にくつきりとしわを寄せて木箱をにらんでいた。

「アンヌマリー。いったいそれは何なんだ？ 蒸した米の匂いがするし、机の上には灰がこぼれてやがる」

「ええっと……実験です。うまくいけば、変わった調味料ができる……かもしれませんが」

「調味料、なあ。そんな作り方をする調味料なんて、俺は知らないが」

料理長の眉間のしわが深くなった。信じられないと言わんばかりの顔だ。

「ま、毒ではなさそうだし、おかしい臭いもしないから大目に見てやるが……俺の仕事場で、あんまり妙な真似まねをするなよ。度が過ぎたら、出入り禁止にするからな」

「はい、気をつけます」

料理長は少々柄がらは悪いけれど、料理についてはとても真剣だと聞いている。彼にとっては謎極まりないコウジの仕込みは、どうにか大目に見てもらえたようだ。

深々と頭を下げて、それからちらりと木箱に目をやる。できあがった味噌を見せてみたら、料理長はどんな反応をするのかなと、ふとそんなことを考えた。



そうして、田んぼで黒い稲穂を見つけてから一週間後の夜遅く。

「白い、ふわふわ……大学の講義で見た写真と、同じ……」

木箱の中の蒸した玄米、その表面にはぼわぼわとした白いものがびっしり生えていた。たぶんこれがコウジだ。おそらく、だけれど。

「玄米に生やしたから、玄米コウジ……ということはこれをそのまま使くと、玄米味噌ができるはず」

コウジを何に生やすかで、味噌の種類が変わるのだと習った。白米に生やした米コウジ、麦に生やした麦コウジ、大豆に生やした豆コウジ、などなど。それぞれ米味噌、麦味噌、豆味噌の材料になる。そして私が食べ慣れているのは、白米を使った米味噌だ。

なので今度は白米を蒸して、そこにふわふわのコウジをそっとすくいとってまき散らした。それからまた布巾をかけて、火鉢で保温。材料がちよっと変わっただけで、やることはほぼ同じだ。

それからさらに三日後の昼過ぎ、私は意気込んで厨房に立っていた。見事に育ったコウジの木箱を手に。今日は休みなので、昼間から堂々と作業ができる。

「これで、米コウジが完成したはず。さあ、いよいよ味噌作りね」

昼食の後片付けをしている料理長の微妙な視線がちくちく刺さっているのを感じながら、改めて作業に取りかかる。

一晩水を吸わせた大豆を蒸してつぶす。コウジは下の米ごと、塩とよく混ぜる。これらをしっかりと混ぜて、おにぎりくらいのおおきさにちぎって丸める。この塊かたまりを、味噌玉と呼ぶらしい。

味噌玉をぎゅつとにぎって空気を抜いてから、酒で消毒しておいた樽たるの内側にみっちり詰め込んで。ここで空気が残ると、カビが生えてしまうらしい。念入りに、ぎゅぎゅつと。

そうやって樽いっぱい味噌玉を詰め込んでから、板と石で落とし蓋をする。ラップがあれば一番なんだけど、当然ながらそんなものはない。とにかく空気に触れさせるな、と言われた覚えがあるので、たぶんこれが最適の形だろう。

「後は、これを数か月寝かせれば完成、ね……」

正確には、これで終わりではない。一、二か月ごとに取り出して詰め直す工程がある。その時にカビが生えていませぬように。今が夏場じゃなくてよかったと、心からそう思う。

「アンヌマリー、本当にそれが調味料になるのか？ ずいぶんたくさん豆を使っていたが」

濡れた手を拭いていた料理長が、やはりぶつきらばうに声をかけてくる。

「たぶん、ですけど。答えが出るのは数か月後です」

「……そのでかい樽、邪魔になるから厨房には置くんじゃないぞ」

「大丈夫です、自室で保存しますから。ほら、ちゃんと室内用の小型荷車も持ってきてますし」

「ならまあ、いいけどな……」

複雑な顔をしている料理長に会釈して、味噌樽を荷車に乗せ厨房を出る。鼻歌を歌いたいのをぐっところえながら、軽い足取りで自室を目指した。

愛しの味噌汁に、また一歩近づいた。そんな手ごたえを確かに感じていた。